

[特集：ウポポイの／での研究]

【コラム：白老町にとってのウポポイ】

自分なりの文化伝承者を目指して —— ウポポイとわたしのこれから ——

山丸 賢雄

はじめに

私は白老町で生まれ育ち、現在はウポポイ(民族共生象徴空間)で働いている。ウポポイでは国立民族共生公園でアイヌ語に関する業務を行っている。アイヌをルーツに持つが、幼少の頃は自分がアイヌであることをあまり意識せずに暮らしていた。

ウポポイの開業準備に伴い閉館したポロトコタン(一般財団法人アイヌ民族博物館)⁽¹⁾では、父や叔母などが働いていたため、幼少の頃は良く父に会いに通っていた。地元アイヌ文化を紹介する施設があり、そこで働く父を尊敬していたが、父と同じ事をしたいと思ったことはなかった。

しかし、今は自分自身がアイヌであることも向き合いながら、ウポポイで働いている。なぜだろうか。幼少から現在までを振り返り、自分自身の問いを探ってみたいと思う。また、ウポポイで働いていると「昔の雰囲気の方が良かった」という感想を耳にする。そこで、ポロトコタンとウポポイでは何が変わったのか自分なりに考察してみたい。

幼少の頃

父がポロトコタンで働くようになったのは私が三歳の頃であった。それからは何かある度にポロトコタンへ通い、父やポロトコタンで働く方々に可愛がられていた。父は白いヒゲを蓄え、派手な着物を着て古式舞踊を踊り、時にはポロトコタンの顔として誘客のために全国各地へ行っていた。目立つことが好きだった父なので、注目されることは嫌ではなかっただろう。しかし、私は父と正反対の性格しており、人前で何かをすることが苦手で

(1)「ポロトコタン」とは、一般財団法人アイヌ民族博物館の通称で、アイヌ語で「大きな湖のところにある集落」を意味する。博物館がポロト湖の辺りに位置していたこともあり、このような通称で呼ばれていた。ポロトコタンは、2018年に公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構と合併し、現在の公益財団法人アイヌ民族文化財団となった。

あった。そのため、心では尊敬しているのに、目立つ父が嫌だった。

当時は父というフィルターを通したアイヌ文化しか知らず、私が思うアイヌ文化は父の姿そのものだったため「白いヒゲを蓄え、派手な着物を着て人前で踊る」というイメージしかなかった。私には向いていないと思った。そのため、将来アイヌ文化を学び、伝えていきたいとは思わなかった。

そのような気持ちのまま小学校、中学校を卒業し、徐々にポロトコタンとも疎遠となっていく。地元の高校へ入学したが馴染めずにすぐに中退してしまった。自分としてはこのときが大きな分岐点だったと思う。今振りかえっても卒業すべきだったと後悔はするが、仮に高校を卒業していたら、アイヌ文化のことには関わらずに暮らしていただろう。しばらく何もせずに家にこもっていたこともあったが、一年ほど一般企業に就職していた時期もあった。一年の半分は北海道外で仕事をしており、心休まる場所がなかった。春ごろに見かねた父から「伝承者育成事業」の参加を提案された。

伝承者育成事業はアイヌにルーツを持つ若手を対象に、三年間を一期としてアイヌ文化を広く学ぶ事業であり、ちょうどその年が三年目で、翌年の新しい研修生を募集するタイミングだったらしい。ポロトコタンを拠点に研修を行っていたため、「地元に戻れる」、「父に甘えられる」という下心から、三年間アイヌ文化を学びながら自分のやりたいことを見つけようという軽い気持ちで応募することにした。その年のお盆が過ぎたころに勤めていた仕事を辞め、募集までの間をだらだらと過ごしていたら年末に父が出張先で急逝した。正直今でも信じられずにいる。そして、私の下心、全面の甘い考えはここで打ち砕かれたのだ。しかし、父に勧められた話ではあったが、参加すると決めたのは自分の意志だったので、そこは貫こうと思い伝承者育成事業へ応募することはやめなかった。

伝承者育成事業

四月から四名の同期とともにアイヌ語や工芸、芸能などアイヌ文化を広く学ぶこととなった。まず自分と同世代の若い人がたくさんいたことに衝撃をうけた。アイヌ文化のことを学びたいと思う若い人がこんなにもたくさんいるのかと思ったのだ。同期の中では私が最年少でアイヌ文化の知識もなく、幼いころからアイヌ文化に親しんできた他の受講生との差に悩んだこともあったが、同期生が親身に助けてくれたため三年間やめずに修了することができた。

毎日様々な研修を行ったが、アイヌ文化の基礎知識も身につけていなかったため、研修内容がただ右から左に流れていくだけだった。最初の一年間は研修内容を理解するための基礎知識をつけることで精いっぱいだった。ようやく研修の内容を理解できるようになったのは二年目を過ぎたころからだと思う。理解できるようになると、ようやく好きな分野や苦手な分野もわかるようになった。中でも特に興味を持ったのが言語であった。周りに

は同じペースで学習する同期生がいて、研修で学んだ内容をすぐに実践できる環境があった。そのため、日本語しか話してこなかった自分が違う言語を使ってコミュニケーションをとっていることに感動し、アイヌ語にのめりこむようになった。

また、研修は白老だけではなく北海道内外へ行き、その土地の伝承者から学ぶ機会もあった。そのたびに父を知っている方が受け入れてくれたため、すぐに地域の方達の輪に入ることができた。人と距離を縮めることは苦手であったが、父のお陰ですぐに輪を広げることができたのだ。

これまで父を通してみてきたアイヌ文化を自分の目で見たことで、自分なりの楽しさややりがいを見つけることができるようになり、それがアイヌ文化を伝えていきたいと思えるきっかけとなった。こうして考えてみると、伝承者育成事業は私とアイヌ文化が関わるきっかけとなった原点ともいえる経験となった。そして、伝承者育成事業だけではアイヌ文化を全て学べるわけではなく、むしろこれからもっと多くのことを学ばなければいけないと感じるようになった。そのため、ポロトコタンへ就職することにした。

ポロトコタン就職と閉業、ウポポイの準備業務

伝承者育成事業が修了し、ポロトコタンへ就職した。ポロトコタンでは次の伝承者育成事業の担当を務めることとなった。しかし、就職した年にポロトコタンは閉業してしまった。私が生まれる何十年も前からあったポロトコタンが本当になくなってしまうのかと思うと、とても寂しく悲しかった。ここで一旦ポロトコタンの歴史に幕を閉じた。閉館後は町内の廃校となった小学校に拠点を移し、引き続き、一年間は伝承者育成事業の担当を務めた。その次の年からウポポイの準備業務に関わることとなった。

アイヌ語

アイヌ語に興味を持つようになった私は伝承者育成事業の研修だけではなく、地元で開催されているアイヌ語教室にも通うようになった。好きで通っていただけだが、取り組みが評価されアイヌ語に関する仕事の話も増えた。例えば「STVアイヌ語ラジオ講座」の講師を一年務めた。その翌年からは地元で行うアイヌ語入門講座の講師を務め、現在四年目である。こうした仕事の積み重ねもあって、私はアイヌ語に関する仕事を続けていこうと思えるようになった。言葉は目に見えないため、魅力が伝わりにくいと感じる。しかしその土地の文化を伝えるにはその土地の言語は切っても切り離すことはできない。

また、アイヌ語には方言があり、北海道内だけでも言葉が異なることがある。方言の違いもその土地の文化を伝える大事な要素であるため、その重要性を伝えていきたいと思っている。

私は地元の白老方言を勉強している。白老方言は資料が少なく、他地域の資料も一緒に

見なければわからないことが多い。とても難しいがやりがいを感じている。

ウポポイでの業務

ウポポイの開業一年前から、開業準備に関わる業務を担当した。私はアイヌ語の体験プログラムを準備することとなった。最初は一人であったがすぐに一人増えて、今は二人でアイヌ語に関する業務を行っている。

ウポポイは新型コロナウイルス感染拡大のため、当初予定されていた開業日から二度の延期を経て開業を迎えた。しかし言葉を伝えるプログラムは新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、それまで検討してきた内容が全く実施できない状態での開業となった。それでも自分たちのできることを行わなければと、急遽アイヌ語による紙人形劇を行うことにした。「三匹のこぶた」や「赤ずきん」など、絵をみればストーリーが理解できる物語をアイヌ語のみで紹介し、少しでも来園者にアイヌ語を聞いてもらい、興味を持ってもらうきっかけとしたかった。

少し状況が落ち着いてからは、予定していたプログラムをコロナ禍でもできるように調整して実施できるようになった。今行っているアイヌ語学習プログラムは参加者に日常でアイヌ語を使う機会を増やしてもらうことを目的に、あいさつなどのアイヌ語を紹介する「アイヌイタカリ アイェロ」と、一つの単語を確実に覚えてもらうことを目的にした、ビンゴで遊びながら学習する「ピリカ！ ビンゴ アキロ」の二つのプログラムである。

特に「ピリカ！ ビンゴ アキロ」は人気が高く、家族連れが多い土日祝日は常に満員となっている。少しでもアイヌ語に興味を持つきっかけとなれば良いと思う。

おわりに：ウポポイとわたしのこれから

アイヌ文化を発信している父の姿を尊敬しつつ、目立つ父が恥ずかしいと思っていた自分が、結局は父に誘われアイヌ文化に関わるようになった。自分がアイヌ文化を学ぶようになり、ようやく父を理解できた気がする。父には父なりのやり方があり、私は私なりのやり方があったのだ。それでも私がアイヌ文化を学ぼうとした直前に父が亡くなったため、「父の遺志を継ぐ息子」という目で見られなくなかった。父のためではなく自分のために学び、地元や次の世代に還元していきたいとこれまで働いてきたが、そればかりを強調すぎて大事なことを忘れかけていた。

ウポポイが開業する直前に印象的なエピソードがあった。開業前に地元の文房具屋から父のシルエットがデザインされたTシャツをいただいた。生前の父もウポポイができることを楽しみにし、開業を待ち望んでいたことを覚えていて、自分はなにもできないが少しでも父のためになればとのことだった。そこでやっと開業を待ち望んでいたのは自分だけではなかったことに気付かされた。開業準備に追われて大事なことを忘れてかけていた。

おかげで開業当日はいただいた父のTシャツを事務室の端にかけ、父と一緒に開業を迎えることができた。

父を切り離して考えすぎたため、父が大切にしていたことまで関係ないことのようにしてしまっていた。父はもういないため、このことをどのように感じたかわからないが、やはり悲しい気持ちにさせてしまっただろう。しかし、アイヌ文化を伝えていくやり方は違っていても、私も父も望む未来は同じだったことを思い出した。

過去と現在を切り離して考えることはできない。ポロトコタンがあつてのウポポイであることは間違いない。しかし、ウポポイではポロトコタンと同じようにできないということが強調されすぎて、地元や昔から働いている人の思いも置き去りにしてしまっているのではないか。そうではないと思っけていても、ポロトコタンを知っている来場者が「すっかり昔と変わってしまった。昔の方が良かった」と言うのはそういった部分を感じ取り、つい出てしまった本音なのかもしれない。

もちろん地元をひいきした施設にしたいわけではないし、アイヌ全体のためになる施設にしなればいけないと思っけている。しかし外にばかり目を向けて地元を置き去りにしている部分もあるのではないだろうか。このバランスが一番難しいが、それでもポロトコタンとウポポイは分けて考えることはできない。全体を良くするためになにかを犠牲にする必要はない。

ポロトコタンが閉館せずに営業していた未来はどうだったかと考えることがある。ウポポイができたことで良くなったことはたくさんあるが、地元の文化を発信していた施設がなくなった事実も忘れてはいけない。

幼少の頃、私は父を通したアイヌ文化しか知らなかった。しかし、ウポポイではポロトコタン以上に様々なことを様々な方法で伝えている。

例えば、幼少の頃の私のように地元の子供たちがひんぱんに遊びに来る施設になったら、ウポポイで様々な体験をした子どもたちが自分でやりがいや楽しさを見つけ、アイヌ文化を伝えていきたいと思えるのではないだろうか。

微力ではあるが、自分より下の世代でアイヌ文化を学びたいという人の助けになりたい。今はまだ先頭に立って引っぱって行くような立場ではないが、少しでもかっこいいと思ってもらえるような人材となれるようウポポイのある白老出身としてこれからも頑張っていきたい。私とウポポイのこれからの期待してほしい。